米軍岩国基地再編に係る日米協議の状況及び「最終報告」に向けた今後の見通しに関する北原防衛施設庁長官からの説明内容

〈平成18年4月28日〉

1　これまでの日米審議官級協議において、岩国飛行場に関しては、米側との間で以下の基本的考え方で実質的に合意した。（下線は「中間報告」以降の日米協議により合意された内容）

①　現在、厚木飛行場に所在する米海兵隊空母艦載機（５７機）と輸送機Ｃ－２（２機）を岩国飛行場に移駐。

②　現在、岩国飛行場に所在する海上自衛隊ＥＰ－３、ＵＰ－３、ＯＰ－３航空機等（１７機）を厚木飛行場に移駐。

③　現在、普天間飛行場に所在する米海兵隊空中給油機ＫＣ－１３０（１２機）を岩国飛行場に移駐。ただし、ＫＣ－１３０はローテーションで海上自衛隊鹿屋基地やグアムに展開。

④　現在、岩国飛行場に所在する米海兵隊ヘリコプターＣＨ－５３Ｄ（８機）を在沖縄海兵隊司令部ともにグアムに移転。

ＫＣ－１３０について、中間報告では、「他の移駐先として、海上自衛隊鹿屋基地が優先して、検討される」とされたことから、わが国としては、岩国基地の負担軽減の観点から、この趣旨を実現すべく努力したところであるが、ＫＣ－１３０が鹿屋に移駐された場合を想定し、所要人員、施設、維持管理コストなどについて、米側内部及び日米間で詳細な検討がなされた結果、鹿屋に１個飛行隊が常駐する場合には、約３００人の部隊の人員に加え、さらに支援要員が多数必要になることなどから、ＫＣ－１３０はＳＡＣＯの勧告通りに岩国に移駐することが、米軍の運用効率の観点から最も適当であるとの結論に至ったところである。また、Ｃ－２については、人員・部品輸送の機能が不可欠であることから、運用上岩国に配備せざるを得ない。他方負担軽減の観点からＫＣ－１３０のローテーションやＣＨ－５３Ｄの移駐を行うことで、今回の日米合意の形になったところである。

なお、「中間報告」以降の日米協議において合意されたＫＣ－１３０の移駐等に伴う騒音については、ＫＣ－１３０とＣＨ－５３Ｄの騒音レベルがほぼ同程度であり、Ｃ－２が低騒音機であること、ＫＣ－１３０がローテーションで鹿屋やグアムに展開すること等から、これまでに御説明している騒音のシミュレーション結果と基本的に同等か、それ以下になると予想している。

2　今回の再編に伴う岩国への米軍の移駐人員等について、日米交渉で合意された内容や現時点で確認できている内容は以下のとおりである。

①　厚木から岩国への移駐については、現時点では空母艦載機部隊約１，９００人、家族約１，７００人、コミュニティ・サポートに従事する民間人約２００人を見込んでいる。

②　普天間から岩国への移駐については、現時点では空中給油機部隊約３００人 、コミュニティ・サポートに従事する民間人約４０人を見込んでおり、家族の人数は確認中である。

③　岩国からグアムへの移駐については、輸送ヘリ部隊約１８０人を見込んでいる。

④　岩国から厚木への移駐については、現時点では海自隊員約７００名、家族約９００人を見込んでいる。

3　これらの内容は、今後、５月２日開催予定の「２プラス２」において、日米間で最終的に取りまとめられる予定であるので、御理解と御協力をお願いする。

4　他方、在日米軍の兵力構成の見直しに係る地域の振興については、十分配慮する必要があると考えており、現在、在日米軍の兵力構成の見直しに関する閣議決定(17.11.11)に基づき、地域振興策について検討しているところである。